

現況分析における顕著な変化に  
ついての説明書

研 究

平成22年6月

富山大学

## 目 次

1. 人文学部・人文科学研究科	1
10. 芸術文化学部・高岡短期大学部	4

## 現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名 富山大学

学部・研究科等名 人文学部・人文科学研究科

## 1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目: 研究活動の状況

## 2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名: 研究活動の実施状況

## ・研究業績について

平成 16～19 年度の評価で本学部・研究科は「平成 19 年度の教員一人当たりの著書・論文発表数は約 1 件であり、研究活動が活発とはいえない」という指摘を受けた。そのとき提出した「学部・研究科等の現況調査表」(研究)では、平成 19 年度 12 月までに発表された研究業績のみを集計対象としていたため、今回は平成 19 年度第四四半期のデータを加えて、平成 19 年度の業績数を 64 件から 98 件に訂正する。この数値を基に計算すると、平成 19 年度の教員一人当たりの著書・論文発表数は約 1.4 件となる。資料 1 のとおり、平成 20、21 年度は、着実に増加している。

資料 1 : 人文学部・人文科学研究科の年度別研究業績数

	H16	H17	H18	H19	H20	H21	合計
論文(単著)・著作	54	63	79	55	65	65	381
論文(共著)	4	5	9	8	13	13	52
書評・翻訳等	5	8	12	19	17	23	84
その他	3	3	2	16	7	15	46
合計	66	79	102	98	102	116	563
教員一人当たり発表数	0.9	1.2	1.4	1.4	1.5	1.7	

## ・科学研究費補助金以外の外部資金の獲得について

平成 16～19 年度の評価で本学部・研究科は「外部資金は科学研究費補助金のみであり、研究活動の状況が読み取れない」という指摘を受けた。本学で作成した現況調査表でその点の記述を省略したためであるが、この 6 年間に獲得したいわゆる科研費以外の外部資金は、総額で 11,305,800 円(寄付金 14 件、共同研究 3 件)、年平均 1,884,300 円である。

## ・環日本海地域の諸文化と交流に関する総合的研究および国際シンポジウムについて

平成 16～19 年度の評価で上記の総合的研究や国際シンポジウムの開催について「顕著な成果が求められる」との指摘を受けた。この指摘を重視して本学部・研究科では、平成 21 年度から学部予算のなかに「シンポジウム等開催支援経費」を新たに設け、同年度中に「日本海総合研究プロジェクト・国際シンポジウム：景観の諸相と言語 日本の言語景観と西洋の言語景観」(富山大学人文学部主催、総合地球環境学研究所共催)など、3 件の学術的イベントの学部での開催を支援した。

上記「日本海総合研究プロジェクト」は環日本海諸文化に関する総合的研究として平成 13 年度に立ち上げ、平成 21 年度まで 8 回のシンポジウムを開催し、その成果は、平成 16 年 3 月に富山県日本海学推進機構出版助成図書、富山県ひとづくり財団出版助成図書として、桂書房から日本海総合研究プロジェクト研究報告 1、2 の 2 冊を刊行(『日本海/東アジアの地中海』、『日本海沿岸の地域特性とことば』)、以後、同報告 3～5 として『日本のフィールド言語学』(桂書房、平成 18 年)、『海域世界のネットワークと重層性』(桂書房、平成 20 年)、及び『東アジア内海の環境と文化』(桂書房、平成 22 年 3 月)として公開している。

以上の研究活動を総合的に勘案し、研究活動の状況に関しては顕著な変化があったと判断する。

## 現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名 富山大学

学部・研究科等名 人文学部・人文科学研究科

## 1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

質の向上度: 事例1「科学研究費補助金の獲得に向けた取組」(分析項目 I)

## 2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

平成 16～19 年度の評価で、「新規採択率は平成 16 年度と平成 18 年度はほぼ同様である点で、改善、向上しているとは言えない」という指摘を受けたが、これは、本学部・研究科教員を研究代表者とするもののみであったため、本学部・研究科教員が研究分担者となっているものについて調査を行った。その結果、研究分担者として採択された件数は、平成 20 年度が 14 件、平成 21 年度が 21 件と着実に増加しており、また、受入金額も平成 20 年度が 6,205,000 円、平成 21 年度が 5,380,000 円と増加している。(資料 2)

資料 2 : 科学研究費補助金研究分担者の件数及び受入金額

	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	合 計
件 数	9	7	9	7	14	21	67
金額 (千円)	5,194	2,360	3,900	3,700	6,205	5,380	26,739

また本学部・研究科では、科学研究費補助金の新規採択の向上を目指し、科学研究費補助金を獲得した実績のある教員を講師として「科学研究費補助金申請を促進するための説明会」を平成 18 年度から毎年度実施している。獲得の前提となる申請の比率は平成 19 年度 88.9%、平成 20 年度 85.9%、平成 21 年度 82.4%と高い水準を維持している。

## 現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名 富山大学

学部・研究科等名 人文学部・人文科学研究科

## 1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

質の向上度：事例2「研究活動活性化に向けた取組」(分析項目 I)

## 2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

平成 16～19 年度の評価における「学部・研究科等の現況調査表」(研究)では、平成 19 年 12 月までに発表された業績のみを集計対象としていたため、それ以降の研究業績及び学会発表について調査を行ったところ、資料 3 及び資料 4 のようになった。

これを見ると、平成 16 年度以降研究業績は増加傾向にあり、平成 21 年度には業績総計で平成 16 年度の 2 倍近くに達している。(資料 3)

また、学会等の発表数も、平成 20 年度以降大幅に増加しており、平成 16 年度の水準を上回っている。(資料 4)

以上のことから、研究水準の向上があったと判断する。

資料 3：人文学部・人文科学研究科の年度別研究業績数

	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	合 計
論文(単著)・著作	54	63	79	55	65	65	381
論文(共著)	4	5	9	8	13	13	52
書評・翻訳等	5	8	12	19	17	23	84
その他	3	3	2	16	7	15	46
合計	66	79	102	98	102	116	563

資料 4：人文学部・人文科学研究科の年度別学会等発表数

平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	合計
40	43	35	18	52	56	244

## 現況分析における顕著な変化についての説明書(教育(研究))

法人名 富山大学

学部・研究科等名 芸術文化学部・高岡短期大学部

## 1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目: 研究成果の状況

## 2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

## ○顕著な変化のあった観点名: 研究成果の状況

林 暁(芸術文化学部教授)は、蓮弁をモチーフとする乾漆造りの食籠を制作し、第56回日本伝統工芸展に出品した。

この作品は、側面に6枚の蓮弁を配し隙間の溝を水が流れ落ちるような造形を施し、蓋の上面を黒、器外側側面を朱として天板甲面の縁で塗りぼかして呂色磨きを施して仕上げとしたものであり、3次元CADとNC切削機でケミカルウッドから原型を削りだして手仕事での修正を加え、乾漆の原型としたもので、食籠内部には6弁の縁を持った懸子が収まっているものである。

同作品「乾漆蓮花食籠」は、平成21年9月、第56回日本伝統漆芸展に於いて、文部科学大臣賞を受賞した。

この展覧会は、文化庁・東京都教育委員会・NHK・朝日新聞社及び財団法人日本工芸会の共催で、平成21年9月25日の東京三越本店での開催を皮切りに、名古屋・京都・金沢・仙台・岡山・松江・高松・広島・福岡・松山・大阪の各都市を巡回、開催された。

受賞後様々なメディアで取り上げられ、代表的なものとしてはNHKの新日曜美術館で作品制作の過程などが放映されたのをはじめ、カースタイリング誌に5ページの特集として制作の概要が紹介された。

展覧会の審査委員による作品解説(第56回日本伝統工芸展図録や日本工芸会ホームページに記載)は以下の通りである。

「底ひなき深奥から湧き出(いず)る浄い水が静かに盛り上がり、いままさに蓮弁の間から流れ落ちるさまをイメージしたという。なるほど、蓋をあければ、懸子(かけご)と身にある金平目粉による蒔き暈(ぼか)し円文は、神や仏の存在、あるいはその発する霊気を暗示していて心にくい。黒の蒔き暈しにみる塗り肌の優美さはもとより、氏の卓越した鋭敏な造形力が、馥郁(ふくい)とした蓮花のフォルムに昇華した秀作。」

この受賞により、芸術文化学部の研究・制作での漆工芸分野の研究成果の状況は、既提出の研究成果の文化庁長官賞受賞の業績(業績番号:39-10-1002)に引き続き、非常に権威のある高い評価を得たものであり、社会、文化への貢献が優秀であり、「期待される水準にある」から「期待される水準を上回っている」へのより高い研究水準にあると判断されるものである。